

当代散文の研究

——記憶のなかの中国革命についての覚書

楠 原 俊 代

は じ め に	277
I 語られなかった「歴史」——文革の場合	279
II 語られなかった「歴史」——北大の場合	283
III 1950年代、2つの文学史の「歴史」.....	287
お わ り に	292

は じ め に—————

20世紀末は、中華人民共和国成立五十周年、抗戦勝利五十周年、北京大学創立百周年などの節目の年を迎えたため、それを記念して、数々の図書や叢書が出版された。それまでの100年を1つの時期として、この間の優れた文学作品（「経典」）の叢書や学術書のシリーズも数多く刊行された⁽¹⁾。北京大学関連の図書の出版も、当時は大ブームになっていた⁽²⁾。国家成立五十周年を迎えるに際しては、新聞出版署が「慶祝中華人民共和国成立五十周年国家重点選題」100種を出し⁽³⁾、その1つであると銘打って『中華人民共和国五十年文学名作文庫』全6巻10冊（作家出版社、1999年9月）と『中国当代文学作品精選（1949-99）』全8巻12冊（北京十月文芸出版社、1999年9月）の叢書などが刊行されている。前者の「例言」には、「二為（文芸為人民服務、為社会主義服務）」の方向と「双百」方針を堅持し、中国作家の半世紀における創作の成果と新中国文学の発展の歷程を集中して展示できるよう努めた、と記している。これらの図書の出版は、この1世紀、あるいは新中国成立後の50年の歴史を振り返り、見直す契機となった。

これらの図書が刊行された前世紀末、1990年代とは、どんな時代であったのか。社会科学文献出版社から1998年2月、洪子誠（1939-、広東揭陽人）・李慶西（1951-、山東乳山人）主編『九十年代文学書系』全6巻が出版されている。その「総序」で、洪子誠は次

のように述べている——90年代に入ってから、社会生活と文学創作に重大な変化が生じたが、この変化に対する見解、評価はまちまちで、対立さえ起きている。90年代に入ってから7、8年経過した今、文学創作を全面的に振り返ってみることによって、これらの歲月における文学の動向と成果を考察すると同時に、重視するに値するテキストを読者と研究者に提示することは必要である。保存すべき資料を選ぶだけではなく、なお確かな把握の困難な「90年代文学」をさらによく理解するためにである。90年代初め、「歴史が無理矢理入り込み」（原文は「歴史強行進入」）、われわれ多くの者の精神の脆弱さが露呈された。このような状況下で「生存と執筆の立場」を認識し、その困難と可能性を理解することは、当面の緊迫した課題である。今でもまだ、この問題は過去のものとなっていない。

洪子誠によれば、「根強く確固とした『新世紀』意識を持つわれわれは、この100年来たえず歴史時期を区分し、新たな出発点をたえず宣言し、どの出発点においても『新世紀』の到来を予告してきた」。80年代中国文学さえ、「わが国の社会主義文学の『新世紀』」と称された。それなのに、80年代から90年代へと移る際には、多くの人に「意気沮喪」しかなかった、程度の差こそあれ「挫折感」しかなかった。銭理群（1939-、四川重慶生れ）も、80年代末から90年代にかけて、彼を含む多くの人々は文化大革命（以下、「文革」と略す）にも劣らない劇変を経た、と言っている⁽⁴⁾。1989年には六四天安門事件が起き、1991年にはソ連が崩壊し、1993年には社会主義市場経済への転換がなされた。

洪子誠は、この時、80年代のあの表面上は一致に近い統一も終わった、と感じた。洪子誠にとって、90年代は、「虚しい楽観を減弱し困難を把握する、表面的な統一から離れ分裂を経験する、盲目的な自信を反省しこれまでの立場を問いたです」時期であり、「ここでは、われわれの立場はまず反省しなければならないのである。（略）反省はわれわれの困惑を必ずしも徹底的に解決するとは限らないが、われわれが困惑と難題を正視することは可能になる。したがって『新世紀』の予言のない時代において、かえってより大きな文化建設の空間があらわれ、確固とした文化創造の成果が出現する可能性がある、ちょうど40年代前期のように」、「この100年の歴史を振り返り総括することは、今われわれの流行となっている。『歴史反思』の角度から見れば、この美しい予言のない『意気沮喪』は、実際には十分に得難いものなのである」と言う⁽⁵⁾。

洪子誠『当代文学史・修訂版』によれば、文学作品として、90年代に突出していたのは長編小説と散文であり、「長編小説熱」「散文熱」と言われた。90年代後期には、毎年出版される長編小説は千部近く、千部を超える年もあった。当然のことながら、反右派闘争（以下、略称を「反右派」とする）・文革などを含む「当代」の歴史についての「反思」が中止されることはありえず、90年代の小説・散文創作の中で継続された。虚構の叙事

文体の他に、90年代後期には、50～70年代の歴史に関する図書も、回想録を含めて次々
に出版された⁽⁶⁾。その散文の選集も、先に上げた叢書に散文巻が含まれるのはもちろんの
こと、前世紀末には数多く出版された⁽⁷⁾。

なお、洪子誠『当代文学史・修訂版』によれば、80年代に「散文」の概念を見直す現
象が起き、叙事的な形態の報告文学と議論の性格をもった雑文は、散文の中から除外、あ
るいは区別されるようになり、多くの批評家・作家から、報告文学・回想録・史伝文学な
どは、曖昧なまま「散文」として見なされることはなくなった、と言う⁽⁸⁾。しかし、先の
引用の中で、洪子誠自身も、「散文熱」「散文創作」という言葉を使っているため、本稿に
おいて「散文」とは、詩歌・戯曲・小説以外の文学作品を指し、雑文・報告文学・回想録
などを含むものとする。

また「反思」とは、「過ぎ去った過去の歴史・歴史思想・歴史事件などを振り返って考
え直す、再考する、反省する」の意であり、1980年代前期には「反思文学」という文学
現象が出現していることから知られるように、過去の自分の言動やありかたに間違いが
なかったかどうか振り返ってよく考える「反省」の意とは異なっていることから、本稿に
おいては「反思」として原文のまま用いる。

洪子誠主編の『九十年代文学書系』全6巻のうち、散文巻は、作家散文巻『新時代的忍耐』
(耿占春(1957-、河南柘城生れ)編選・導言)、学者散文巻『冷漠的証詞』(洪子誠編選・
導言)の2巻を占め、後者の洪子誠の「導言」のタイトルは、「90年代：責任と焦慮の間で」
である。

節目の年を迎え、多くの人がこの100年の、あるいは50年の歴史を振り返り、その「歴
史」について語ったが、この時、それまで語られなかった「歴史」について述べるものも
数多くいた。本稿は、当代散文の研究を通して、中国革命⁽⁹⁾の「歴史」が、いかに語られ
てきたか、いかに語られようとしているかについて、考察しようとするものである。

I 語られなかった「歴史」——文革の場合——

2006年は、文革発動40周年、文革終結30周年の節目の年であった。ところが中国国内
では、社会の安定に危害を及ぼさないためにということで、記念活動はおこなわれない。
文革について討論することに対する、当局の圧力は、10年前よりもさらに厳しいものとな
り、中央宣伝部は各地でいかなる記念活動をおこなうことも禁止している。専門の学会
もなく研究経費もないために、学術論文の発表も関連研究の発展も困難であり、学生も集
まらない。

陳四益（1939-、四川成都生れ）によれば、いつからかは分らないが、「文革」を語るとはタブーとなってしまうようだ、そんな指示が出された記憶もない、それどころか「文革」を徹底否定する決定すらおこなわれたというのに、と言う⁽¹⁰⁾。また詩人の公劉（1927-2003、江西南昌人）も「中国においては、真話（本当の話）を語るとは極めて困難であり、特にそれを書いて正式に出版することはほとんど天にも昇るほど困難なことである」と述べている⁽¹¹⁾。

かくして、大多数の人々は文革に関心を持たなくなり、「歴史の教訓について、今の若者はすでに、あまりにも少しか知識を持たない、あるいは無知ですらある。数世代の人々が、血を代価に得た悲痛な教訓はあと一世代で伝わらなくなるかもしれない。（略）しかし、若者の無知を責めることはできない。彼らは何によって知ることができただろう。彼らを無知のままにしておいて、先の悲劇を繰り返さないと保証できるだろうか。だから『反思』の図書の出版は必要なのだ」⁽¹²⁾とも言われている。

以上のことについては、すでに別稿において述べた⁽¹³⁾。中国革命の「歴史」が、いかに語られてきたか、いかに語られようとしているかについて考察するために、これまでかなりの量の回想録を中心とする当代散文を渉猟してきたが、学校教育においてはどのような状況にあるのかわからなかった。

ところが、手元にある馬識途（1915-、四川忠県生れ）の『滄桑十年 共和国内乱的年代1966-1976』（中共中央党校出版社、2006年6月第1版、以下『滄桑十年』と略す）の「後記」（1998年10月）361・362頁には、史上前例のない文革で被害を被った自分にとって文革は終生忘れられるものではないが、若い世代の者にとっては、「文革について、彼らの教科書に一字も記されていないため、どんなものだったのか見当もつかず、老人世代が文革について語っても、まるで『アラビアン・ナイト』で、どうしてそんなにデタラメなことが起こりうるのか、としか思わない」と記されている。また同書「前言」2頁には、文革について、馬識途の子供の世代の者は、文革時10歳ほどであったためまだおぼろげながら記憶はあるが、孫の世代は「文化大革命」という名詞すらまるで知らない、とある。

本章においては、1998年10月の時点で、中国では教科書に文革についての記述がなく、馬識途の孫の世代は「文化大革命」という名詞すらまるで知らない、ということの特筆しておきたい。

韋君宜（1917-2002、北京生れ）は回想録『思痛録』を1976年から1986年まで執筆、1988年には編集を終え、1989年初め出版社に送付するが、1998年まで出版できなかった。馬識途も『滄桑十年』を10年近くかけて執筆、その後6年間箱の底深くにしまっておき、さらに2年間の紆余曲折を経てようやく1999年1月中共中央党校出版社から初版が出版された。

同書「後記」で、馬識途もまた、文革のような悲劇を繰り返さないために、われわれは中国社会発展の歴史から、文革発生の根源を探究し、深く考察し、どのようなものであったかだけでなく、なぜ起きたかを知らなければならない、この真理のために、悲劇を繰り返さないために、赤誠をこめて本書『滄桑十年』を捧げる、と記している。

馬識途は、季羨林（1911-2009、山東臨清人）の『牛棚雜憶』を読んで感銘を受け、『滄桑十年』の原稿を持って、季羨林を訪ねたところ、季羨林もまた次のように語ったと言う——長年待っていたが、文革を反映した書物は出ず、文革の災難はほとんど忘れ去られてしまいそうだ。ここから教訓を学ぶことなく、このような悲劇がまた繰り返されてはと心配し、勇気を奮い起こし、赤誠をこめて『牛棚雜憶』を書いた。

この時、馬識途は『牛棚雜憶』に続く書として、何としても『滄桑十年』を修正して、出版することを決意したと言う（366頁）。「牛棚」とは牛小屋のことであるが、文革中は、「牛鬼蛇神」と言われて階級の敵とされ、批判の対象となった人々が入れられた牢を指す。『滄桑十年』は、中共中央党校出版社から1999年1月に出版され、季羨林が1998年6月4日付でその「序」を執筆している。

季羨林の『牛棚雜憶』は、1998年4月中共中央党校出版社から初版が出版されている。

手元の『牛棚雜憶』（中央党校出版社、2005年第2版）の「自序」「縁起」「後記」によれば、『牛棚雜憶』は1992年に書き上げられていたが、季羨林を吊るし上げた人々に、報復されるのでは、と心配させないため（1頁）もあり、6年後の1998年ようやく出版された。

もともと本書を執筆するつもりはなく、1976年に文革が終結してから16年も経ってからようやく書き始めたが、この間、彼は「反思」・観察・困惑・期待していた。彼は、誰かがみずから被ったこの災難を書くことを期待しつつけたが、誰も書かず、口述筆記する者もあらわれず、失望した。人を吊るし上げ、死に至らしめさえした当時の造反派、実際には殴打・破壊・略奪をはたらいた者は、なぜ自分が人を吊るし上げた時の心理状態とその過程について書けないのか？この二方面への期待は、満たされなかった（4、5頁）。「傷痕」文学が流行ったこともあったが、彼から見れば、皮膚をぶつけて怪我をしたが、赤チンをつけさえすれば万事めでたしといった程度にすぎないもので、真の傷痕は多くの人々の心の奥底に深く隠され、表にあらわれてはこない。この空前の災難を記述に留め、教訓にしなければ、将来同じことが繰り返されることもありうる。何と恐ろしいことではないか。

そこで彼は、人に期待するだけでなく、自分で書くことにしたのだが、先の二方面への期待を放棄したわけではない。私の書いた文章は、嘘を語ったものでも小説でもなく、歴史的事実である。牛棚に入れられた者は、確かな統計はないものの、何千何万といたはずであるが、全国の人口の中ではわずかな数である。この経験は書くべきであり、自分は作

家ではなく、名文は書けないが、書かなければならない、それは不可能ではない、と考えた。しかし当時の生活は二度と思い出したくなく、思い出せば今でもまだ身の毛がよだち、思い出すのをやめていた。ところが、他の人が書いた文章や書籍を読んでもいつもまるで満足できず、彼の読みたいものは書かれなかった。牛棚に入れられた経験のある者で、文章の書けるものは百人も千人もいるのになぜ沈黙したまま語らないのか。もっとも恐ろしいことは、文革が終結してまだ20年も経たないのに、人々がそれを完全に忘れてしまいそうになっていることである。悲哀、孤独、恐怖のみならず、彼には堅固な信念があった。この災難の経緯をありのままに書けば、「この偉大な民族の鑑」になる、この鑑に照らしてみれば、何をすべきで、何をすべきでないか、知ることができて、この上なくよいことではないか、と考えた。

本書には、1988年3月4日から1989年4月5日まで、1年余をかけて、断続的に執筆された草稿があったが、1992年春に見直しを決意し、同年6月3日まで約3カ月かけて定稿が完成されたもので、草稿と定稿は別のものといってよいほど違い、ほとんどもう一度書いたようなものであった（6、11、183頁）。本書は血と引き換えにして、涙とともに執筆したものであり、生きて本書を書き上げることができたのは、生涯最大の幸福であり、後世に贈る最善のプレゼントである、と言う。

韋君宜『思痛録』も季羨林『牛棚雜憶』も、前世紀末の1998年に出版された。この半世紀の歴史を「反思」するのは、1998年における図書出版の一大特色である、と丁東（1951-）が言うように、1998年には、この他に朱正（1931-、湖南長沙人）著『1957年的夏季——從百家争鳴到兩家争鳴』、戴煌（1928-、江蘇阜寧人）著『胡耀邦与平反冤假錯案』、邵燕祥（1933-、北京生れ）著『人生敗筆』など歴史を「反思」する好著が数多く出版された。これらの図書の出版について「文革熱」「反右（派）熱」という人がいたが、丁東は、これは適切ではない、事実と合わないと考える。これらの本は簡単に書かれたものではなく、大部分は作者が長年にわたって心血を注いで書き上げた結晶である。これらの図書が1年の内に前後して出版されたのは、何とか熱を起こそうと企図されたものでは決してなく、中共第15回党大会、第9期全人代第1回会議が前後して開催されて、出版環境が提供され、出版社で棚上げにされたまま、長年に渡って許可の下りなかった好著がようやく1998年に読者にまみえる機会を得たのだ、と言う⁽¹⁴⁾。

なお、季羨林『牛棚雜憶』・馬識途『滄桑十年』とも、韋君宜『思痛録』と同様に複数の版があり⁽¹⁵⁾、韋君宜の『思痛録』は版によって大幅な削除箇所があり、異同がきわめて多いため、『牛棚雜憶』・『滄桑十年』の各版にも大きな異同がある可能性があることを付言しておく。

Ⅱ 語られなかった「歴史」——北大の場合——

1 謝冕・胡的清主編『北大遺事』（青島出版社、2001年）

1998年は北京大学（以下「北大」と略す）創立百周年の年でもあり、同年5月4日には、人民大会堂で国家主席の江沢民も出席して盛大な記念式典が挙行された。当時はまた北大関係の図書の出版も大ブームとなって、多くの図書が出版された。

このことについて、謝冕（1932-、福建福州人）は、「世界各地から燕園に集った数万の師友とともに母校の百周年を祝ったことは永遠に忘れられない」と記す一方で、日常に戻った北大で、次のように記している⁽¹⁶⁾。

北大は畢竟北大であり、北大は祝日式典のような活動には不慣れである。北大人はこの祝日を1つの反省の機会として、この100年の北大の歩んできた道程を反省することを好む。歴史的にかつてどのように輝かしかったか、後にまたどのようにそれが失われたのか？ 蔡元培（1868-1940、浙江紹興人）が提唱した北大精神はどれほど真に今日に至るまで残されているか。その輝きを発することができたか、どれほど修正され、またどれほど今や跡形もなくなってしまったのか？ 1つの学校も1人の人間と同じように、かつてどれだけ羨望するに値する歴史を持っていようと、遺憾な点がないはずはない。

謝冕は、「創立記念の日々、私は昔からの友人と集う以外は、多くの時間を歴史を鑑とする思考にあてていた」と言う。当時、数多く出版された北大関係の図書についても、『北大旧事』と『北大往時』の2冊にのみ注目、前者は北大設置当初から抗戦前までの文章が、後者は1977年文革の動乱が収束し入試が復活して、教育制度が軌道に乗って以来の文章が収録されている。これらは歴史的な、また現実の北大の真実の状況を提供してくれる。謝冕が遺憾に思うのは1937年から1977年までの時期の北大の歴史についてはいまだ専著で語られていないことである。ちょうどこの40年は、北大が旧から新へ、その新からふたたび本当に旧にかわり、ようやく悪夢が終わり改めて新生を獲得した、浮き沈みの激しい歴史の転換期であった。この時期の北大が被った災難はもっとも多く、経験はもっとも豊富で、人の魂をもっとも震撼させるものである。北大の100年を回想するならこの40年を思わずにはいられない。この40年が欠けていたなら、完全な北大とはならず、欠けた北大である、と言う。

そこで謝冕は、この年、珠海から北大へ訪問学者として来ていた胡的清（1957-、湖南常德人）とともに主編となって、この「欠けた北大」を補い、北大と世の人々に綿々とつづく記憶を残すべく『北大遺事』の編集を始め、2001年に青島出版社から出版した。書名の『北大遺事』は、故事でなく、軼事でもなく、逸事ではもっとなく、かつて確かにいた人の事跡である遺事なのである。

2 銭理群『拒絶遺忘』

文革の災難が「ほとんど忘れ去られてしまいそうだ（幾乎要被人遺忘了）」という状況の下で、季羨林は勇気を奮い起こし、赤誠をこめて『牛棚雜憶』を書き、馬識途はそれに続く書として『滄桑十年』を書いた。銭理群は、さらに『忘却を拒絶する（拒絶遺忘）』の書名で次の2種類の図書を出版した。

『拒絶遺忘：「1957学」研究筆記』（Hong Kong: Oxford University Press (China) 牛津大学出版社、2007年）、全502頁、以下、香港版『拒絶遺忘』と略す。

『拒絶遺忘：銭理群文選』（修訂版）（北京：中国大百科全書出版社、2009年5月、第1版）、全418頁、以下、北京修訂版『拒絶遺忘』と略す。

北京修訂版『拒絶遺忘』には、20世紀90年代の銭理群の思想的成果を代表する文章38編が収録されている。同書、2008年10月16日付「再版前言」によれば、本書は9年前の旧作の修訂再版本であり、誤植を訂正した以外、基本的に初版のままと言うが、初版本については未見。

香港版『拒絶遺忘』は、すべて反右派闘争について記されたもので、初版が香港の牛津大学出版社から、2007年に出版されている⁽¹⁷⁾。

『拒絶遺忘』北京修訂版と香港版は同じ書名ではあるが、中身はまったく別物である。この双方に収録されているのが、北京修訂版の「不容抹煞的思想遺產——重読北大及外校『右派』的言論」と、香港版の「代序：不容抹煞的思想遺產 重読『北京大学右派分子反動言論匯集』、『校内外右派言論匯集』」である。本文の初出は、牛漢（1923-2013、山西定襄人）・鄧九平（1962-、江西新淦人）主編『原山草：記憶中的反右派運動』（經濟日報出版社、1998年）であろう。以下、本文は「不容抹煞的思想遺產」と略す。

銭理群は北大中文系教授（2002年停年）、1956年北大入学、その後人民大学に編入し、60年人民大学新聞系を卒業。78年北大大学院中文系に入学、81年碩士（修士）修了。彼は北大における反右派闘争を、身をもって体験した。

銭理群は1998年7月1-8日に書いたこの「不容抹煞的思想遺產」の最初に、北大創立百周年記念活動の幕は下り、喧噪も終わり平静を取り戻した、まさに「反思」の時である、と記している。彼は、この間、北大について多くを語り、書きもした。しかしわれわれは北大に関する多くのことを、無意識のうちに忘れていたかのよう、そればかりか意識して忘れてさえいた。創立記念日、多くの昔話をしたが、ほとんど反右派以前に限られていた。これも不思議なことではない。それ以後のことは言いにくいから。われわれ校友の北大の記憶の中には、あの一時期の耐えがたい、心の痛む、だから「言いにくい歴史」が深くしまわれている。誰が軽々しくひっかきまわしたいであろう、「重きを避けて軽きに就く」

のは人の常である。

このことについて、彼は次のように語る——もしこれがただの個人の記憶であるなら言いにくければ言わなければよい、それだけのこと、生活の中にはこのようなことは多すぎて、どうしていつまでも考えてばかりいて忘れないことなどだろう。しかし、もしこれが学校、民族、ある時代の記憶なら？北大百周年のために書かれた目も眩むばかりの各種の図書をひっくりかえしてみても、私は発見した。1957年のこの一時期について、北大の歴史叙述、記憶の中からすでに消失してしまい、まったくの空白に変わって、何も起きなかったかのように、わずかな痕跡も留めていないのである。当時の論調のままに「右派」学生を描いた一冊を除いて。

銭理群は、本文の中で、20世紀の歴史をまさに総括し「反思」するわれわれは、驚き喜びながら、次のことを発見したと言う。1957年に右派とされた学生らの主張する「社会主義思想意識の改造運動」が、今世紀初（1917年開始）の五四新文化運動および世紀末（1978年開始）の思想解放運動と言葉から思想までなんと似ていることか。その中に貫かれている「独立、自由、批判、創造」の精神は、銭理群から見れば、これが北大精神の核心の所在であり、それはまさに中国現代知識分子の基本モデルである。そこで彼は、本文によって「1957年学」を樹立することを提唱したのだが、そのことを、香港版『拒絶遺忘』の「写在前面」においてのみ明記している。

3 洪子誠「北大記憶・批判者和被批判者——北大往時之一」

語られなかった「歴史」——北大の場合については、洪子誠も「北大記憶・批判者和被批判者——北大往時之一」のなかで書いている。洪子誠は北大中文系教授（2002年停年）、1956年北大中文系文学専業に入学し、61年卒業。本文は、洪子誠・么書儀（1946-、北京人）共著の散文集『両憶集』（北京大学出版社、2009年）の巻頭に収録されているが、その末尾に、「北大宣伝部門の依頼を受けて、本文は1998年北大創立百周年記念の前夜に執筆するも、返却され採用されなかった」との付記をつけている。

とはいっても、本文は『両憶集』のみならず、么書儀・洪子誠共著の『両意集』（学苑出版社、1999年、王学泰主編の随筆叢書『学苑叢談』の1冊）にも収録されている。さらに、同じ文章が、タイトルを「一点往事」に変え、前掲谢冕他主編の『北大遺事』にも収録されている⁽¹⁸⁾。

洪子誠は、「北大記憶・批判者和被批判者——北大往時之一」のなかで、1950年代後半から1969年までの、みずからが参加した政治運動について、特に文革期に学生から批判されたことと、1958年の「抜白旗、挿紅旗」運動で、王瑤（1914-1989、山西平遙県人）

を批判したことについて詳しく記している。「抜白旗、挿紅旗」運動とは、「資産階級」の権威ある専門家を批判する運動で、当時北大にいた数多くの著名な学者の学術思想と研究成果は、この時にすべて批判された。

洪子誠の所属していた班が批判したのが王瑤だった。王瑤の著作で主に批判されたのは『中国新文学史稿』で、1949年以後もっとも早く出版され、当時もっとも影響力を持った中国現代文学史である。王瑤と『中国新文学史稿』については、次章において記す。当時、洪子誠らはまだ中国現代文学史を授業で学ぶこともなく、『中国新文学史稿』に記された多くの文学現象と作品については、すべてよく知らないものであった。しかし本書が資産階級の性質を持っていると認定された以上、われわれ「無産階級の立場」上に立脚する「小人物」にはその権威を蔑視する資格があった、と洪子誠は言う。

この時、洪子誠らは毛沢東の『新民主主義論』と『文芸講話』をまず学習し、周揚の反右派を総括する文章を学習し、それから、それらを「武器」として『中国新文学史稿』における資産階級の立場と観点、方法を探した。こうして彼らは何編かの長い批判文を書き上げ、雑誌社に提出、それらは1958年下半年に文芸界の権威ある雑誌『文芸報』と『文学研究』上に発表された。そのうちもっとも主要なものは、北京大学中文系二年級魯迅文学社集体写作の署名で発表された、「文芸界两条道路的闘争不容否定——批判王瑤的『中国新文学史稿』」。その後間もなく王瑤の名前は『文芸報』編集委員の名簿から消えた⁽¹⁹⁾。

このように王瑤は批判されたのであったが、洪子誠は、王瑤自身、もともとこの流れに順応しようとしていたと言う。王瑤は反右派闘争が始まったばかりの時、「一切的一切」を『文芸報』1957年第12期（6月23日）に発表して右派分子を批判、『文芸報』1958年第1期（1月11日）には、「關於現代文学史上幾個重要問題的理解——評雪峰『論民主革命的文艺運動』及其他」を掲載して馮雪峰を批判している。洪子誠は、王瑤が馮雪峰を批判した論拠と論理は、その半年後に彼らが王瑤を批判する時の論拠と論理なのであった、と記している。王瑤は「災難」から逃れることはできず、洪子誠もまた文革の時、同じように「災難」から逃れることはできなかった。

洪子誠は文革を経た後に、文革とそれ以前に体験したことをあわせて次のように考えるようになったと言う——われわれが遭遇した不正常的事態の種はすでにまかれていて、しかもわれわれがみずからその種を播いていたのだ、ということを意識しはじめた。われわれが尖鋭かつ酷薄な言辞を用いて、理由もなく真摯な思想の成果を攻撃した時、実際は、「批判者」もまたみずからを「被批判」の位置に置いていたのである。

洪子誠が耐えられなかったのは、文革期に彼が学生に「尋問」し批判されたことがらが、「抜白旗、挿紅旗」運動期に、彼が政治騒動を追いかけて紙誌に発表した、当時流行して

いた文章と同じだったことであると言う。彼らが50年代に「排除」しようとしたものは、王瑤著の『中国新文学史稿』『中古文学史論』であったが、それは批判者が最終的にはそこに戻って教えを請う著作なのであった。多くの挫折を経た後、洪子誠は王瑤のなかに一種の成熟と尊厳を見、誰もが社会と歴史の拘束・制約から逃れる術はないが、可能な限り進むべき道を選択することはできるということを、王瑤から学んだ。

洪子誠は次のように述べている——100年の歴史を刻んだ北大について、われわれが個人的にその光輝と衰退、光栄と恥辱を語るのは難しい。われわれに語れるのは、個人としてみずから感じた「伝統」である。もっとも重視すべき「伝統」は、代々の教師学生の中に保たれているあの素質である。それによって外部と自身の不健康な要素を調節・濾過し、各種の騒動のおかげで変幻極まりない時勢の中においてさえ、健全な性格と正直な学術の道を確立する気力である。この種の素質の確立と伝授は、成功と栄光のみならず、われわれ各人の経てきた挫折によってもなされると言える。ちょうど王瑤先生の人生と学術の道がわれわれに留めた深い印象のように。

Ⅲ 1950年代、2つの文学史の「歴史」——

1 王瑤『中国新文学史稿』

王瑤の『中国新文学史稿』は、上冊が開明書店から1951年9月、下冊が上海文芸出版社から1953年8月に、さらにその修訂重版が上海文芸出版社から1982年に出版されている。『王瑤全集』（河北教育出版社、2000年）第3・4巻に収録されたのは、1982年の修訂重版である。

王瑤は、著名な文学史家・教育家、中国民主同盟中央委員、第2・6・7期中国政協委員、中国作家協会理事、中国現代文学研究会会長で、北大教授であった⁽²⁰⁾。1934年清華大学中文系に入学した彼は、1935年一二九運動に参加、韋君宜と同じく、1936年5月に中共入党、入党後は、楊述（1913-80、江蘇淮安人）が指導⁽²¹⁾。王瑤は、若いころから若干のマルクスレーニン主義の知識を受け入れ、愛国学生運動にも積極的に参加、一度は中共にも加入し、大学院生の頃からマルクス主義の中国古典文学研究者になろうと決心していた。マルクスレーニン主義を指導的思想とする新中国の成立を、みずからの理想を実現する好機と見なし、みずからの理想は必ず実現される、と考えていた。そこで、「新文学史」の課程が開設された時、党の要求を受け入れて、中国古典文学研究から現代文学研究に喜んで転向した。

1950年5月、教育部が招集した全国高等教育会議で「高等学校文法両学院各系課程草案」

が通過し、「中国新文学史」は各大学の中国語文系の主要な課程の1つとなり、その内容は以下のように決まった——新たな観点と、新たな方法を運用し、五四時代から現在に至る中国新文学の発展史を講義する。その際、各段階における文芸思想闘争とその発展状況、および散文・詩歌・演劇・小説等の著名な作家と作品についての評論叙述に重点を置く。

王瑤の『中国新文学史稿』は、上記の方針に依拠して編集執筆された、中国新文学史の教材だったのである。中国新文学史は、後に中国現代文学史に改称される。ここで、本書批判の経緯について、銭理群の「一代学者の歴史困境——王瑤先生和他的『中国新文学史稿』的命运」⁽²²⁾によってまとめておく。

王瑤の『中国新文学史稿』は、1952年、55年、58年、66年の4回批判されている。

「新文学」は、新民主主義革命と密接に結びついていた。新中国・新政権・新社会はすべてこの革命の産物であり、この革命に対する歴史的評価は、新中国・新政権・新社会の歴史的地位の確立を直接決定づけるものであった。歴史を新たに書き直すことによって、新たな革命政権と、その指導者である中共および革命イデオロギーの歴史的合理性を論証し、その歴史的正当性を確立し、さらには、新政権の制定する新たな文芸政策と文芸の発展に対する指導に、歴史的根拠を提供することが、王瑤の使命であった。

王瑤とその他の同時代の研究者が、「新文学は新民主主義革命の一部である」ことを承認した以上は、必然的に、毛沢東の「新民主主義理論」を理論的基礎とし、毛沢東の新文化・新文学に関する観点を論証の必要のない先験的結論とすることになった。そこで王瑤は『中国新文学史稿』の中で、一方では、毛沢東の論述に依拠して、新文学の基本的性質は「無産階級思想が指導する、人民大衆の、反帝反封建の民主主義文学」であり、革命的進歩的文学を十分に肯定すると同時に、もう一方では、新民主主義時期は、「まだ社会主義ではなく」、「民族資産階級は一定の時期において、一定程度の革命性を有していた」という毛沢東の論述を根拠として、資産階級の作家に一定の評価を与えた。

王瑤は『中国新文学史稿』を執筆することによって、みずからの学術的生命と新政権・新社会を結びつけた。これは、王瑤が新旧社会を対比してみずからなした選択であり、マルクス主義を信仰する学者にとっては必然的な選択でもあった。ところが、新政権の合法性と正統性に歴史的根拠を提供するために執筆された本書のおかげで、運動が起きるたびに王瑤は「典型」として吊るし上げられ、見せしめにされることになった。

最初は1952年8月に『文芸報』が招集した座談会で、本書の作者は資産階級の立場に立っている、と批判された。30年代文芸統一戦線における闘争と発展は、マルクスレーニン主義文芸思想が主導的地位にあった。本書各章の「緒論」においてはこの点を認識しているにもかかわらず、具体的に作家と作品について論じる際には、資産階級・小資産階級と

無産階級の思想を代表する団体と作家を区別することなく同等に扱っている、主従を混淆しているところが最大の誤りである、と言うのである。

王瑤ら新中国の第一世代の史学家は、みずからの政治信仰から、みずから望んで、あるいは半ば望んで、党性原則に従って、みずからの学術研究を現実の政治的必要に服従させる一方で、「歴史的事実を尊重する」という学者としての立場を貫くこととの間の葛藤に苦しんだ。しかも、政治指導者は政治闘争の必要のために、歴史と現実に対する判断を常に不断に変更することが、学者らに更なる苦境をもたらした。

『中国新文学史稿』上冊と下冊の出版された1951年と1953年では、政治状況が変化していた。1953年には、毛沢東の指示に従って新たな任務が打ち出された。社会主義文学に歴史的根拠を提供するために、新文学に新たな評価が出され、「五四以来の中国革命の文学運動は、労働者階級思想の指導の下、社会主義リアリズムの方向に沿って発展してきた」ことが強調され、新文学史は、「新文学における社会主義リアリズムの萌芽・成長・発展の歴史」であることになった。資産階級作家に一定の科学的評価を与えた王瑤の『中国新文学史稿』は「大逆非道」と見なされた。

こうして、王瑤ら進歩を求める学者は、みずからの政治信仰に忠実に、自覚して、不断に変化する政治的必要に服従し、みずからの学術的観点を不断に変えてゆくか、あるいは、事実を尊重する科学原則とみずからの学術的観点を堅持して、永遠に政治的信任を失い、革命と進歩の隊伍から排斥されるかという、二つの困難な選択を迫られた。しかも王瑤が生きた時代には、政治的必要は絶対のものであり、いかなる背反も知識分子自身の生命に直接脅威をもたらした。みずからの生存のため、いくらかはみずからの信仰のために、王瑤もまた同時代の大多数の知識分子と同じように、時代についてゆこうと努力した。王瑤は、反胡風・反右派の時には、胡風や右派を批判する文章さえ書いた。

2 謝冕・孫紹振・劉登翰・孫玉石・殷晋培・洪子誠著『回顧一次写作——〈新詩發展概況〉的前前後後』（北京大学出版社、2007年11月）

王瑤『中国新文学史稿』を批判する一方で、1958年の夏休みには、1955年に入学した孫玉石（1935-、遼寧海城人）ら北大文学専攻の学生が集団で『中国文学史』を編集執筆、本書（上・下冊）は、同年9月国慶節を祝賀する図書として人民文学出版社から出版された⁽²³⁾。

1958年末から1959年初めには、北大中文系学生だった謝冕・孫紹振（1936-、福建長樂人）・劉登翰（1937-、福建廈門人）・孫玉石・殷晋培（1939-92、天津人）・洪子誠の6人が、『詩刊』社と同副主編の徐遲（1914-96、浙江吳興人）の依頼を受けて組織され、1カ月も

ない冬休みを利用して『新詩発展概況』を執筆した。本書は「当代」において初めて出た新詩簡史の一つで、全文約10余万字、7章からなる。前4章は『詩刊』1959年6・7・10・12号にそれぞれ掲載された。後の3章は『詩刊』に引き続き掲載されることなく、当時のガリ版印刷（第5章）と手稿（第6、7章）が存在しているだけである。『詩刊』社は天津の百花文芸出版社に推薦し、単行本として出版しようとしたが断られた。『詩刊』社は文革が終結したとき、加筆修正したうえで完全な新詩史を出すつもりであったが、時勢が変わり、6人の作者の心の向く先も変わって、この話は立ち消えとなった。

この『新詩発展概況』の全文を収録した『回顧一次写作——〈新詩発展概況〉的前前後後』が、謝冕・孫紹振・劉登翰・孫玉石・殷晋培・洪子誠の共著で、2007年11月に北京大学出版社から出版された。本書は、以下、『回顧』と略す。

『回顧』出版の経緯については、本書「前言」(洪子誠著)に、次のように記されている。

新詩を研究する若い友人らから、50年代の詩歌に対する見方、詩歌史の叙述方式、大学教育と学術体制についての資料として、『新詩発展概況』を出版するよう提案された。特定の時代に生み出された『新詩発展概況』に何の学術的価値もないことは明白で、謝冕ら6人の作者は、新詩に対する見方も80年代以来大きく変化していたため、本書を再版するには、本書に加えて、本書出版の経緯とこのことについての「反思」もあわせて出版しなければならないと考えた。この時、謝冕・孫玉石・洪子誠は北大中文系教授、孫紹振は福建師範大学文学院教授、劉登翰は福建省社会科学院研究員、殷晋培は遼寧省鞍山市文連で働いていたが、1992年に病死。

「反思」に際しては、単純な自己批判でも、当時のイデオロギーを批判するのでもなく、本書が出版された歴史的条件と、その条件がどのように作者らを形成したのかについて、できる限り明らかにしようとした。そこで本書執筆時の回想を8つの質問に書面で答える形で、6人が互いに連絡をとることも、他の人の回答を見ることもなく、執筆した。質問とは、

1. 『新詩発展概況』の編集執筆は、どのように始まり、組織されたか？なぜこの6人が執筆することになったのか？この任務を引き受けた当時、どのように考えたか？
2. 1958年前後、事実上の中国新詩簡史を執筆した動機は何か？当時、どのような文学史観を持っていたか？

などで、質問に対する回答は、洪子誠が整理編集し、注釈も加えて、『回顧』第一部に収録された。

第二部は、『新詩発展概況』の本文で、第三部は、6人のこれまでの学術研究、すなわ

ち60年代と、特に「新時期」以来、文学観や研究における視野や方法がどのように変化し、進展したかについて、各人がみずから語った文章を、第4部は、6人の略歴と主要編著目録を収録した。

『回顧』出版の理由は、上記のこののみならず、「個人的」には、1958年当時20歳前後であった6人の、『新詩発展概況』の編集執筆を通じて生まれ、それから50年近くにもわたって続いてきた友情を記念するためでもあった。

洪子誠は、「事情的次要方面」（前掲『兩憶集』所収）の中で、『回顧』執筆時の困惑と、出版後の反響について、以下のように記している。

来し方を回顧する者は、記憶を、生きる中で、かつて存在した不安や苦痛、恥と疾しさをどのように適切に按排すれば、「かつての私」と「今の私」が同じ人間であることに恥じないでいられるか、という問題に直面する。50余年前に『新詩発展概況』を書いたことが罪だと言うわけではないが、『新詩発展概況』には幼稚さと粗暴さが見られる。論述の誤りはさて置くとしても、事物の描写、世界に対する見方、詩人とその作品を評価する時の尺度、「本質主義」的な、真実は掌中にあるという態度、是非は明々白白といった独断に、読み返してみても洪子誠は驚いた。この文体は、「過酷な時代」の余裕のなさの不寛容さを示している気がする。しかもこのような気風は、過去のものとならずに、今もなおわれわれの中に蔓延し続けている。それを償還すべき「債務」と見るか、糧となる「遺産」と見るかの違いがあるだけであろう。

ところが、『新詩発展概況』の中から、国家の大事を論じるに際し、すべてを顧みず、明晰で疑義を差し挟む余地のない判断を下す「勇氣」を発掘した若い学者がいた。彼らは本書の著者の「威風堂々」たる姿をこそ称賛し、著者の「今日」における反省や懺悔は不必要である、と遠回しに批判しているのかもしれない。

この若い学者らの見方について、洪子誠は、あの時代がその当事者の心に何を残したかを、彼らが知らないからであろう、と言いつつも、彼らの見方には軽視できない深い意味があるのではないかと、すなわち「われわれがこのように過去を否定し、その否定された過去をまた否定するという断裂と反復は、われわれの正常な生命の過程なのであるのか？」と考え込む。そこでまた「当代」における体験・信念・感情は、「それを異質な元素として剔出するのであれ、それを書き換えて同質化することの連続であれ、いずれにしても明らかに新たな遮蔽と抑圧機制の形成を意味している」という難題に遭遇したのだと言う。

洪子誠は、『回顧』執筆中からこの難題に困惑していた。最初は、これらの体験を処理する自信を確かに十分に持っていたが、執筆を進めるにつれて、自信を失っていった。多くの事柄はすでに曖昧になり、残された碎片と痕跡のどれに取り上げる価値があるのか、

どう繕い、繋がりをつけてゆくか、何に焦点を当てるかに困惑した。第一部の『新詩発展概況』執筆時についての回想は、質問に6人が「独自に回答」する形をとったのも、個人としての感情や経験を記すことによって、「歴史」との関わり方とその解釈の差異を明らかにしようとしたのであったが、当時感じたものの形と質だけではなく、「反思」の視点・方法・解釈の方向に至るまで、予期した結果からはほど遠いものであった。

「多元」的なコンテキストにおける視点と精神（心）が「規範化」されている（今日の）状況は、（1958年の）「一体化」された時代に経験した「同質化」の状況よりも大きく改善されたわけではなかった。記憶と経験は、何を取り上げて使い、どう配置するかについても、すでに「刻まれ」てしまった「時」の助けを借り、集団の記憶が形成した標識となる事柄と解釈の枠組みに依拠してしか有効に機能しない。『新詩発展概況』執筆時に「立ち返る」ことによって、新たな意義を見出そうとしたのであったが、結局のところ自覚しないうちにこの出来合いの「罨」に落ちてしまい、意気阻喪してしまった、と洪子誠は述べている。

お わ り に

反右派・文革などを含む「当代」の歴史についての「反思」の図書は、前世紀末のみならず、21世紀に入ってから、出版されつづけている。

2008年11月には、中央党史研究室元副主任であった李新（1918-2004、四川榮昌人）の回想録、『流逝の歲月——李新回憶錄』（陳鉄健整理）が、山西人民出版社から出版された。

本書「前言」で、李新は、次のように述べている——私は歴史工作者であり、歴史を研究する者である。私は、歴史は歴史本来の姿にもとづいて、信史・真史を書かねばならないと考える。しかしそれは難しく、様々な困難がある。古来、真史を書こうとすれば、まず政治的に大きな困難に遭遇する。「齊に在りては太史の簡、晋に在りては董狐の筆」から知られるように、真史を書けば命を落とす危険にさらされることもある。しかし中国の史学は、まさにそれ故にこそ栄えある偉大な伝統が形成された。すなわち、真実ではない歴史を書けば、史徳に背き、史学家としての良心を喪失したということになる。

ところが、李新がみずから体験したいくらかの歴史的事実がすべて政治的目的のために、高名な「史学家」らによって歪曲されてしまっている。彼は自分の良心に従いそれを是正する責任がある、だから回想録を書かねばならないと考えるようになった、と言う。「悪を隠し、善を称える」ような回想録は、本当のことを隠しはしていないが、あまりにも偏って、全体像からはほど遠いため、自分の知っていることについて補足し、後の世の人々が

真相を全面的に理解できるよう、自分にその資格があるかどうかはかまわずに、回想録を書かねばならないと決意するにいたったのである。指導者は政治的判断から、出版社は危険を恐れて、いずれもこのような回想録を出版したがないため、自分がどうしても書き上げなければならなかった回想録は、しばらく党史機関に送って棚上げにするしかない、李新が1997年4月に書いた文章は、「前書」として収録され、その回想録は、彼の死後の2008年ついに出版された。

何方（1922-、陝西臨潼人）の回想録『從延安一路走来的反思：何方自述』は、香港の明報出版社から2007年に出版されている。

中共党史では、1943年7月康生が「過ちを犯した者を緊急救助する」という報告をおこない、抢救運動が始まったとしているが、何方は本書で、この開始時期はデタラメで、1942年秋から冬にかけて開始、時期は単位によって完全に同じというわけではない、「われわれの党史は、あまりにもデタラメが多い」と記している⁽²⁴⁾。韋君宜は『思痛録』の中で、抢救運動を1942年のこととして記述していた。楠原は党史に基づき、これを間違いだと考えていたが、本書によって、間違いではなかったことが明らかとなった。

中共党史は「あまりにもデタラメが多」く、歴史的事実が、政治目的のため高名な史学家らによって歪曲されているという現状で、個人は歴史にいかに関与しうるのか、個人の証言（記憶）は歴史の中でいかなる意味を持ちうるのか、また文学（散文）作品が歴史に対していかなる役割を果たしうるのか。中国革命の「真史」とはいかなるものであったのだろうか？何方が修訂版『党史筆記——從遵義會議到延安整風』で言うように、「鍵は多く読み、多く比べ、多く考える⁽²⁵⁾」ことにあるのだろう。

註

- (1) 例えば、以下のシリーズが刊行された。

『百年中国文学經典（1895前後-1996）』全8巻（北京大学出版社、1996年）、謝冕・錢理群主編。

『中国百年文学經典』（海天出版社、1996年）、謝冕・孟繁華主編。

『百年百種優秀中国文学圖書叢書』全109冊（100種）（人民文学出版社、2000年）、本叢書編輯委員會編、王安絳・石湾等編輯。

『二十世紀中国小説理論資料』全5巻（北京大学出版社、1997年）。

『百年中国文学総系』全12冊（山東教育出版社、1998年5月）、謝冕主編。

- (2) 謝冕・胡的清主編『北大遺事』（青島出版社、2001年）、謝冕「序」2頁。

- (3) 『中国当代文学作品精選（1949-99）』（北京十月文芸出版、1999年9月）、「出版説明」による。

- (4) 錢理群「矛盾与困惑中的写作」『文芸理論研究』（華東師範大学出版社）1999年第3期（5

月25日) 50頁。

(5) 洪子誠・李慶西主編『九十年代文学書系』全6巻(社会科学文献出版社、1998年2月)、洪子誠「総序」(1997年10月) 1、2、3、4、7頁。

(6) 洪子誠『当代文学史・修訂版』(北京大学出版社、2007年、2008年第6次印刷) 331、333頁。

(7) 例えば、以下の選集が出版されている。

『中国当代文化書系 1949-99』全7巻(北京・大衆文芸出版社、2000年)、季羨林総主編。

散文巻『曠世的憂傷』上下、主編：邵燕祥・林賢治。

随筆巻『七月寒雪』上下、主編：姜德明。

雑文巻『真話的空間』上下、主編：牧惠・藍翎・朱鉄志。

報告文学巻『歴史痕跡』上下、主編：柳萌。

『中華人民共和国五十年文学名作文庫』(作家出版社、1999年9月) 全6巻。

散文雑文巻、主編：季羨林、副主編：林非。

『中国当代文学作品精選(1949-1999)』(北京十月文芸出版、1999年9月) 全8巻12冊。

散文巻、主編：巴金。

雑文巻、主編：何満子。

『思憶文叢』全3巻(経済日報出版社、1998年9月)、牛漢・鄧九平主編。

『原山草：記憶中の反右派運動』、『六月雪：記憶中の反右派運動』、『荊棘路：記憶中の反右派運動』。

『火鳳凰叢書』(上海遠東出版社) 20余種、陳思和・李輝主編。

『沈從文家書』、張中曉『無夢樓隨筆』、朱東潤『李方舟伝』(1996) 他。

『中国雑文大観』全4巻(天津・百花文芸出版社、1994年)、1918-1989年の雑文を収録。

第4巻、編集・序言：牧惠、1976-89年の152人の作家の186編を収録。

『中国新文芸大系』。

散文雑文集(1937-49)(北京中国文連出版公司、1996年)、田仲済・蔣心煥主編。

散文集(1949-66)(北京中国文連出版公司、1987年)、呉有恒・黄秋耘主編。

雑文集(1949-66)(北京中国文連出版公司、1991年)、曾彦修・秦牧・陶白主編。

雑文集(1976-82)(北京中国文連出版公司、1987年)、曾彦修・秦牧・陶白主編。

(8) 洪子誠、前掲『当代文学史・修訂版』316頁。

(9) 執政党となった中共権力がおこなった思想言論弾圧である反右派闘争や文革などを「中国革命」の範疇で論じることについて、韋君宜著『思痛録』(註15参照)には、例えば、

韋君宜自身について、「みずから革命に長年参加してきた」(第9章)、

夫の楊述の言葉として、「私は何十年も革命に従事して」きた(第10章)、

右派とされた馮雪峰について、「彼の数十年の革命の歴史は抹消」された(第16章)、

とあることから、本稿においては、毛沢東と中共中央、あるいは中共の上級の指導の下におこなわれたすべての政治運動を「中国革命」とする。

(10) 陳四益「不該忘却の歴史——讀『思痛録』」邢小群・孫珉編『回応韋君宜』(大衆文芸出版社、2001年) 279頁(『大公報』原載)。

(11) 公劉「触人痛思的『思痛録』」、前掲『回応韋君宜』272頁(『同舟共進』1998年第9期原載)。

(12) 丁東「反思歴史不宜遲」、前掲『回応韋君宜』365、366頁(『出版広角』1998年第6期原載)。

(13) 「文革期文学における集体創作の再検証」(『南腔北調論集』東方書店、2007年)、「韋君宜

の著作における『歴史』の意味について」(『20世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所、2009年)。

- (14) 丁東「反思歴史不宜遲」、前掲『回応韋君宜』363、365頁。
- (15) 韋君宜『思痛錄』には、以下の5つの版がある——1998年5月北京十月文芸出版社から刊行されたもの、2000年香港天地出版公司から刊行されたものと、2003年1月文化芸術出版社から『思痛錄・露沙的路』として刊行されたもの、2013年1月人民文学出版社から増訂記念版『思痛錄』として刊行されたもの、2013年4月人民文学出版社から刊行された『韦君宜文集』(全5巻)に収録されたもの。

季羨林『牛棚雜憶』(中央党校出版社、2005年第2版、全244頁)、『牛棚雜憶手稿本』(中国言実出版社、2006年12月)、『牛棚雜憶』(中共中央党校出版社、1998年4月、全299頁)など。

馬識途『滄桑十年』(中共中央党校出版社、2006年6月第1版、全367頁)、『滄桑十年』(中共中央党校出版社、1999年1月、全479頁)、『滄桑十年』(『馬識途文集』第8巻所収、四川文芸出版社、2005年5月、全385頁)など。
- (16) 謝冕・胡的清、前掲『北大遺事』、「序」1-3頁。
- (17) 本書については、白井重範「錢理群の戦略——『拒絶遺忘：“1957年学”研究筆記』を読む」科学研究費基盤研究(B)『「文化大革命」の文化史的再考』2009年度研究会記録／文化大革命関連書籍・資料目録(2010年3月)1-16頁を参照。
- (18) ただ先に引用した付記が収録されているのは『兩憶集』のみで、『兩意集』と『北大遺事』にはない。
- (19) 『文芸報』1958年第19期から。
- (20) 「王瑤先生生平」『王瑤先生紀念集』編集小組編『王瑤先生紀念集』(天津人民出版社、1990年)1-2頁。中国民主同盟には、1944年間一多の紹介で加入。
- (21) 「王瑤年譜」『王瑤先生紀念集』444頁。
- (22) 中国現代文学研究会・北京大学中文系編『先驅者の足跡——王瑤學術思想研究論文集』(河南大学出版社、1996年)所収。
- (23) 謝冕・孫紹振・劉登翰・孫玉石・殷晋培・洪子誠著『回顧一次写作——〈新詩發展概況〉的前前後後』(北京大学出版社、2007年)14、15頁。
- (24) 何方『從延安一路走来的反思：何方自述』(香港明報出版社、2007年)109、110頁。
- (25) 何方『党史筆記——從遵義會議到延安整風』(香港：利文出版社、2005年初版、2010年修訂版第2次印刷)上冊、316頁。